平　成　24　年　7　月　30　日
横浜市公立大学法人評価委員会
資　　料　　3

平成23年度公立大学法人横浜市立大学の年度計画に対する各委員評価一覧

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組	11	B	B	○次年度からの国際総合学部の大幅な学系・コース再編を控え新体制における教育充実のためのカリキュラムの整備、共通教養教育の理念につての情報の共有化、学位授与基準の明確化等の準備が着実に進められたことを評価し、これらが新体制のもと確実な成果を挙げることを希望する。 ○生命医科学研究の拠点となる生命医科学分野に係る大学院研究科の設置準備が着実に進められていることを評価する。 ○外部研究費の獲得に積極的に取組み、法人化以降の年度最高額（37億円）を獲得したことは、研究活動充実への積極的取組みの具体的成果のひとつとして高く評価する。
			B	○年度計画を上回っている取組も見られ、概ね順調に運営がなされていると思われる。
			B	
			B	
			B	

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-1　教育に関する取組	11	A	A	
			A	○少人数教育を進める体制が確立されたこと、国際化の取組が進展したことは評価できる。多人数教育の抜本的見直し、英語教育の充実、看護師国家試験が4年連続100%を達成したことは評価できる。
			B	
			A	○医学部の教育に関して、医学教育センターの設置に向けた準備をおこない、新たに教員を3名採用するなど、準備が進んでいる。医師、看護師、保健師ともに良好な合格率を保っている。これらの学科における教育は単に資格試験の合格率を高めるためだけに行われるものではないにしても、やはり重要である。 大学院の再編が進んで、生命医科学研究科での教育が始まる。大学院の再編が実質化することを期待したい。
			B	○国際総合科学部のコース再編後の新コース体制が整い、学部・大学院の一貫教育に向け、学部運営に新コースカリキュラムが策定され、体制整備が一段と進んだことを評価したい。また医学部では定員増後の教育水準の維持向上のため、教員の増員、医学教育センターの設置準備など授業体制を整えたことも評価する。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ－1－(1)全学的な取組	11			○国際総合科学部を中心に教育充実のためのFD研修会が計画どおり実施されていることは評価するが、参加教員数の増加及びその内容の一層の充実を期待したい。 ○特別選抜の改善、指定校推薦入試制度など優れた学生確保のための戦略的入試への取組みが進められていることは評価する。なお特に国際総合科学部において市内高校出身者がやや減少していることは残念である。 ○地域連携の一環として横浜市立高校との連携の強化を図り、横浜サイエンスフロンティア高校からの特別入学枠の設定、金沢高校英語担当教員のための研修講座の開催、また同高校教員による教育実習の模擬授業の実施等の注目すべき取組みが進められていることを評価する。 ○グローバル都市協力センター（GCI）を設置し、総会及び国際シンポジュウムやワークショップの開催など学生相互の交流を含めたアカデミックコンソーシアム事業を着実に進めていることを評価する。 ○英語による授業科目及びその受講者数、さらにこれらの科目の単位修得者数がいずれも着実に増加しつつあることを評価する。
				○医学部～1．カリキュラム変更による改善点の抽出と次年度カリキュラムへの反映が充分に行われているか。 2．学生アンケートの結果について各診療科へのフィードバックが年度内でできなかった。 ○市立高校との連携及びアカデミックコンソーシアムの推進（地域貢献及び国際化）については、計画を上回る実績をあげたことは評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ－1－(2)学部教育に関する取組	20			○コース再編後の新カリキュラムの策定を通じ、両学部教員参加によるFD研修会の開催など特に共通教養教育の充実に向けた各種の取組みが、コース再編後の教育において具体的成果を挙げることを期待したい。 ○プラクティカルイングリッシュ科目のさらなる充実に向けて、インストラクターFDの開催、PEセンターの体制拡充等の取組みが積極的に進められていることを評価する。 ○国際総合科学部においてコース再編を踏まえ、経営系を中心に教員採用を実施し、少人数制による質の高い教育実施体制を整備したことは評価できる。 ○私費留学生の資質向上のための取組みは評価するが、大学国際化の主要指標のひとつである留学生数の今後の増加に向けての総合的な取組みの強化を期待したい。一方、協定締結大学への派遣や各種海外フィールドワークの充実、新規の語学研修プログラムの開発等を通じて日本人学生の海外への派遣数の増加に努めていることは評価する。 ○医学部の入学定員増に対応するため医学教育センター体制の整備、教育担当教員の増員、教育用設備の充実、さらに授業評価等学生アンケートの実施、成績不振者への面談等の各種の取組が進められていることを評価する。学生アンケート結果の授業等への的確な反映にさらに努められたい。 ○国際総合学部のコース再編に伴うカリキュラム整備の一環として学部･大学院一貫のコースカリキュラムを策定し、また関係規則の整備を行ったことは評価するが、いわゆる一貫教育ないし修士課程早期履修制度のあり方はカリキュラム編成のみに止まらず学部・大学院の教育理念・体制そのものにも係わる問題であり、大学としての基本方針の明確化と取り組み体制のさらなる具体化を期待したい。 ○看護師国家試験の合格率が4年間100%を維持していること、また看護学科卒業生の市内就職率が向上しつつあることを評価する。
				○留学生の受け入れについては、昨年度より6名増加の１４６名に留まっており、法人設立時の平成17年度と同数であり、まだ、法人の受入体制が充分でない。 ○英語教育の充実や諸国家試験の合格向上等については、大いに評価できる。
				○指摘されていた国際化への取り組みについても、本学の特色の一つとして進めてきたアカデミックコンソーシアムを推進させ、平成23年4月からグローバル都市協力研究センターを設立し、新しい展開がみられたほか、英語教育についてもAPEの運用開始、PEセンターの体制強化など充実に一段と力を入れており、今後国際化への環境整備が進むことを大いに期待したい。 ○コース再編後のカリキュラムに関連して、共通教養と専門教養との連携を考慮し、抜本的な見直しを進めたことを評価したい。また遅れていたGPA制度を、平成24年度入学者より適用するため、要綱の改定、教務電算システムの整備を進めたことを評価する。 さらに前年度医学部の国家試験合格率が低下し、懸念を指摘していたが,各般の対策を講じ、従来の高合格率レベルへ改善されたことは、その努力を多とし、看護師国家試験の合格率が4年連続で100%を達成したことも合わせ評価したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-1-(3)大学院教育に関する取組	32			○学部との一貫教育を可能とする制度整備が進められたことは評価する。 ○従来学部レベルで実施されていた海外フィールドワークに大学院学生が参加しうる体制を整備したことを評価する。 ○一部の研究科において入学者が定員を大幅に充足していないことは残念である。入学定員の適正なあり方について十分検討されたい。 ○医学研究科修士課程から同博士課程へ進学する際の入学検定料・入学金の免除制度を新設したことを評価する。 ○高度の看護学研究者・指導者の育成を目指し看護学専攻博士課程の設置に向けの取組みが進められていることを評価し、その早期開設を期待する。
				○本学の特性をいかし、理系,医系融合した生命医科学分野への取り組みとして生命医科学研究科の平成25年4月設置に向け準備を進めたことを評価し、その成果を大いに期待したい。 また高度専門看護職等を育成するため看護学専攻の充実を図るとともに、感染看護、がん看護はCNS教育課程として認定されたことを評価したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ－1－(4)学生支援に関する取組	36			○専門相談員の新規配置、就職関連講座の開催増等の学生支援のための取組みが進められるとともに大学院も含めた全学的なキャリア教育体制構築への検討が積極的に進められていることを評価する。 ○授業料減免制度を一本化するとともに新しいタイプの減免制度をスタートさせるなど経済的困窮度の高い学生の支援の充実を進めていることは評価する。なお、財源不足のためとはいえ市大独自の奨学金制度が中止されたことは残念である。経済的困窮度とは視点を異にする奨学金制度の今後の再出発を期待したい。 ○メンタルヘルスケアを必要とする学生に対する継続的な取組みを充実されたい。 ○交換留学生のうち来日する留学生のための宿舎確保方策の見直し、充実のための取組みの進展を期待したい。
				○年度計画では、市大奨学金新規申し込みの対応マニュアルの整理とあるが、実績は、授業料減免制度の拡充への財源確保のため平成２３年度で新規採用を中止としたとなっており、理由はともかく、年度計画とは違ってしまった。 ○魅力的な留学生支援ネットワークの構築は、実績に現れなかった。
				○キャリア教育体制と就職支援の充実について専門相談員の配置、就職関連講座・ガイダンスの開催数の増加などにより、厳しい雇用情勢のなか就職内定率が前年より1.2％上昇し95.0%と高い水準を達成したことは率直に評価したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-2　研究の推進に関する取組	42	B	B	
			B	
			B	
			B	○臨床薬理センターでの第Ⅰ相治験の受け入れについては、First in Japaneseであっても、かなりの経験を要するものなので、一方で人材の育成に力を入れながら、今後も目指していただきたい。 基礎研究については、本学が最も得意としている分野を中心として、徐々に力がつきつつあり、競争的資金の獲得額も増加していることは評価できる。
			B	

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-2-(1)研究水準及び研究の成果等に関する取組	42			○外部研究費獲得のさらなる強化のため、科研費公募説明会の開催や申請手続きの事務的フォローの充実等に努めていることは評価できる。 ○市民を対象とするエクステンション講座等の開催回数及び参加者数が引き続き増加経過傾向にあり、また開催地域の偏在解消も進められていることは評価できる。
				○外部研究費を高額取得したことは、研究のアクティビティーを示す一つの目安として評価できる。
				○外部研究費の受入額が法人化以降最高額となったことは、大いに評価できる。 ○教員による生涯学習の充実～エクステンション講座について、市北部地域で新たに開催するなど、全市的に開催されるようになったことは評価できる。
				○科学研究費補助金の獲得拡大に向けた様々な努力、工夫により外部研究費受入額が法人化以降最高額となる35億円超となったことは評価したい。 また研究成果や知的財産を地域社会へ還元する地域貢献について、これまで医療分野や生涯学習などですでに高い実績を上げてきたが、少し遅れていた産業界とのかかわり、市の政策への提言などについても新しい動きが具体的にみられ、一定の成果を上げつつあると認められる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-2-(2)研究実施体制等の整備に関する取組	46			○諸準備が整わなかったとはいえ、治験受入れ推進のため設置された臨床薬理センターにおける第1相治験が当初の予定どおり実施できなかったことは遺憾である。 ○学際的・複合的ユニットによる戦略的研究費の活用について、新分野として大学所蔵貴重資料のデジタルアーカイブ化の促進を決定したことは評価できる。
				○医療の研究計画が予定どおりに実施できなかった。
				○年度計画の第１相治験を開始するを実施できなかったことは残念である。
				○先端医科学研究センターの施設建設について予定どおり着工し、平成24年12月に竣工される見通しとなり今後の研究推進の拠点となることを期待する。 一方平成２２年度に開設した「臨床薬理センター」において第Ⅰ相治験の受け入れが、実績、設備等の条件が整わず計画どおりにいかなかったことは遺憾に思う。また最先端がん治療における放射線療法に関連して、先端技術実証・評価設備整備費等補助金への応募が不採用となり断念したことも残念である。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-3 教育研究の実施体制に関する取組	49	B	B	○学術院が本格的に活動を開始し、教育研究、学生支援等に係る各種のユニットが設置され、それぞれの課題の具体的検討を進めていることを評価する。なお今後例えば秋入学制への取組みや大学間共同の教養教育体制の整備のあり方など今後予想される教育体制整備上の基本的課題への対応についても積極的に取組みを進めることを期待したい。
			B	○新たな教員組織の構築により、横断的教育・研究の推進、教員間の情報共有、意思疎通が一歩一歩前進することを期待する。
			B	
			B	
			B	○懸案となっていた学内横断的、領域横断的な課題について新しい学術院の成果として教育分野、研究分野で様々な課題について対応する実施体制（ユニット）が立ち上がり、すでに一部その成果が現われており、今後本格的な活動と進展が期待される。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅱ　附属２病院（附属病院及び附属市民総合医療センター）に関する目標を達成するための取組	50	B	B	○特に附属病院において大学病院としての医療機能充実等を目指し、血液浄化センターや救急病床の整備等各種の設備投資を行うとともに7対1看護の安定的実現等のための人材確保の諸施策の充実を図ったことは評価できるが、結果的に経常費用増加分を病院収益で補えず、赤字決算となったことは残念である。 ○両病院を通じて東日本大震災後被災患者の受入れ、医師・医療技術職等の現地派遣等の対応を積極的に進めてきたことは評価できる。
			B	
			B	
			B	
			B	

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅱ－1　医療分野・医療提供等に関する取組	50	B	B	○両病院において7件の先進医療を取得し、特にセンター病院で当初の目標を大きく上回る4件を取得したことは評価できる。 ○センター病院において精神科救急入院料1を取得し増収を図るとともに病床利用率の改善を進めたことは評価できる。 ○地域連携の取組みにおいて、附属病院における紹介率及び逆紹介率が向上したことは評価できる。一方センター病院においてもその双方の比率がやや低下していることは、地域医療連携支援を標榜する同病院として残念なことである。
			A	○東日本大震災に際して患者の受入れ、医師の派遣に積極的に協力した。先進医療への取組において、7件の承認を得た。
			B	
			B	○先進医療の獲得について、熱意をもって進められている。附属病院での手術件数の増加は、手術室の体制を整備しつつ、実現をはかっていただきたい。
			A	○付属病院において救急患者の受け入れを推進し、前年を大幅に上回る患者を受け入れ、センター病院では高度救命救急センター、総合周産期母子センターなどとして、付属2病院の役割分担と協調により医療政策上求められる医療機能を担う中心的病院として役割を果たしたと評価したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅱ-2　医療人材の育成等に関する取組	59	B	B	○医学部入学定員の増加に対応し教育の質の維持、確保を図るため、病床実習教員の採用、教育用スペースの整備等が進められていることを評価する。 ○良質な臨床研修医の採用体制の強化に努めたものの、両病院において研修医が定員割れとなってしまったことは残念である。研修環境の整備に向けての取組みの充実を期待する。 ○両病院とも医師が診療、教育、研究に集中しうる環境整備の一環として、新たに医師事務作業補助者を採用し医師の文書作成等の作業負担軽減を進めていることは評価できる。 ○非常勤診療医採用枠の活用、シニアレジデント等の育児休業承認、院内保育年齢の引き上げ（センター病院）等を通じて、引き続き女性医療スタッフの職場環境の整備に努めていることを評価する。
			B	○女性医師や看護師の復職支援の拡充・改善を更に積極的に進めてほしい。
			B	○臨床研修医の育成に関し、両病院共に定員割れになったが、センター病院では2年連続で定員割れであり、研修医採用体制の強化を図るは必ずしも実現したとはいえない。 ○医師等が診療・教育・研究に集中できる労働環境の向上及び女性医療スタッフの復職支援や働きやすい環境へ整備については、順調に実施された。
			B	
			B	○医学科定員増に対応し、病院実習受け入れ体制強化のため付属2病院に新設された医学教育センター内に病棟実習ユニット14名を採用したほか、施設整備品の拡充を行い、概ね計画通り実績を上げたと評価をしたい。ただ、臨床研修医の確保についてはプログラムの見直しや説明会、採用試験の回数増などの努力にも拘らず付属2病院とも定員割れとなったことは残念である。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅱ-3　医療安全管理体制・病院運営等に関する取組	69	B	B	○両病院を通じて、院内研修の充実・各種会議等の開催などを通じて情報の共有、安全意識の向上に努め、即時公表を要する医療事故件数をゼロとしたことは評価できる。 ○附属病院において手術件数の増加等医療機能充実のための看護師等の要員の配置に努め必要な人員は確保したものの配置に見合う収入を確保できず、人件費及び人件費比率の目標を達成できなかったことは残念である。 ○両病院において後発医薬品の採用や共同購入の推進に努めたことは評価するが、結果的に医薬材料費比率の目標が達成できなかったことは残念である。 ○両病院において施設設備更新計画に基づく整備が進められ、また附属病院ではこれらの整備に加え、自家発電機の整備等東日本大震災を受けた災害対策を追加的に実施した。 ○附属病院において、高評価のもとに病院機能評価Ver6の認定を得たことを評価する。 ○両病院とも病院運営に関する諸指標の整備に努めているものの、附属病院において診療科別原価計算のデータ整備が進んでいないことは残念である。
			B	○目標を達成しない課題も見受けられるが、附属病院において病院機能評価Ver.6の認定を受けたことは評価できる。
			C	○医療安全管理体制については、順調に実施された。 ○病院運営等に関しては、附属病院について ①赤字決算　②人件費 ・ 人件費比率の増加　③医療材料費比率の増加が当年度の大きな問題点であり、特に、赤字決算については、決算終了時まで判明しなかった点は、病院運営の大きな問題である。
			B	○即時公表するべき医療事故がなかったことなど、医療安全についての取り組みは評価できる。
			B	○過去の反省を踏まえ医療安全文化の醸成に組織を上げて様々努力をされたことが窺われ、その結果付属2病院とも即時公表の医療事故件数ゼロとなったことは評価できる。さらに、医療用麻薬事件への対応として麻薬を定数配置している全部署にビデオカメラを設置されたことも有効な対策と、評価したい。また、病院機能の充実について、付属病院は病院機能評価Ver.6を受審し高評価で認定証を取得したことも評価したい。一方、職員の増員、手術室の運用拡大など病床等の稼働を上げる要因があったにも拘らず、配置に見合った収入につながらなかったことは残念であったが、今後の収益増につながることを期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ　法人の経営に関する目標を達成するための取組	83	B	B	
			B	○ガバナンス・コンプライアンスの欠如が散見される取組も見られ、一層の努力を期待する。
			B	
			B	
			B	

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-1　業務運営の改善に関する取組	83	C	C	○経営方針会議等の会議体の運営方針の改善、有効活用等を通じて、理事長･学長を中心とした経営管理体制を強化し、また各種の研修会の実施、内部監査の充実、さらには学内コミュニケーションの充実等さまざまな機会･手法を通じて構成員全体に対する規律の保持、コンプライアンス意識の徹底に努めていることは理解できる。しかしながら個人情報の紛失やタクシー運転手への暴行事件の発生に加え派遣社員による後援会経費の着服事件が明るみに出たことは学内規律の在り方に重大な疑念を生じさせ、これまでの一連の取り組みの手法とその有効性に大きな疑念を生じさせかねない極めて遺憾な事態である。ガバナンス及びコンプライアンスの強化など法人運営の抜本的改善に対する早急な取組みを強く期待する。
			C	
			C	
			C	○テニュア･トラック制度はいつも言葉だけで少しも進んでいるように思えない。いつまでも引き続き検討ということでよいのか、疑問である。 ○いくつかの不祥事のために、低い評価をせざるを得ない。今後大学のトップと職員の間で、共通の価値観のもとでの情報交換を促進する方向で克服することをお考えいただきたい。
			C	

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-1-(1)ガバナンス及びコンプライアンスの強化など運営の改善に関する取組	83			○教職員を対象としたYCU法人ニュースを年間8回にわたり発信し、大学運営の方向性、課題等について理解を深め、情報の共有化に努めたことは評価できる。こうした日常的な取組みを通じて構成員全体の意識の共有・深化が進められることを期待する。 ○前年度も指摘したコンプライアンス意識・職業倫理の遵守に向けた各種の取組みが進められているが、センター病院における個人情報の紛失等の不祥事が生じていることにかんがみ、さらなる取組みの強化を期待したい。 ○派遣会社社員による医学部後援会費着服事件が発生したことは極めて遺憾である。公金外とはいえこうした資金の管理は明らかに法人の正規の業務の一環として行われているものであり、このたびの事態は法人業務執行全体の厳正さと規律の保持に疑念を生じかねない重大な問題であることを認識し、早急に抜本的是正を図られたい。
				○ガバナンス・コンプライアンスの強化に全力を挙げて取り組んでほしい。
				○大学の活動や経営方針等に関する情報周知など学内コミュニケーションの改善及びコンプライアンス推進体制の強化等については、経営方針会議等で適時実施されているとあるが、その結果が出ていない。今後共強く改善を続ける必要がある。（預け金問題、医学部における人事問題や教授によるハラスメント問題、センター病院の個人情報の紛失、派遣会社社員による医学部後援会費着服 etc. ）
				○教育、医療の分野はエリートの集団として個々の責任と信頼のもと組織運営がなされ、ガバナンスが機能しにくい組織風土となっていることは理解できるが、これまでに頻発した様々な不祥事件を憂慮せざるを得ない。勿論、発生の都度、事態を深刻に受け止めこれまで努力をされ，徐々に改善されていると理解しているが、ガバナンスの基本である理事会の機能強化や理事長、学長、病院長などの権限明確化とリーダシップについて再点検を望みたい。また、最近発覚した人材派遣職員による不祥事について、医学部の本来業務外の会計処理で管理意識が希薄だったということはあるが、ほぼ一年間に延べ104回にわたり全くチェックもされず放任されていたということであり、事務管理の基本を欠く極めて遺憾な状況を図らずも露呈する結果になった。改めて徹底した点検を望みたい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-1-(2)人材育成・人事制度に関する取組	85			○これまで幾度か指摘した教員のサバティカル制度が試行という形とはいえ一部実施に進んだことは評価するが、教員人事制度の基本ともなるべきテニュア・トラック制度についての具体的検討が進んでいないことは教員のモチベーション向上とも深く係わる重要事項であるだけに大変残念である。これらの課題についての早急な結論を期待したい。 ○安定的な法人運営の確立に資する一環として法人固有職員の採用、育成を着実に進め、特に新たに4名の管理職登用を決定したことを評価する。 ○職員のメンタルヘルスケアの充実への取組みが進められていることは評価できる。
				○教職員のメンタルヘルスケアの充実については、計画を着実に実行し、効果を上げたことは評価できる。
				○法人化以降、職員の固有化率を着実に高めており、その戦力化にも人材育成プランに沿って努力され、研修の充実、キャリア形成の支援、ワークライフバランスなど様々な人事政策を推進しており、これらを評価したい。ただ、固有化率は現在56.7%であり、引き続き不断の努力を期待したい。また、教員のモチベーション向上と人材確保につながる制度として、かねてから課題となっていたサバティカル制度が平成24年度から試行されることとなり良としたいが、検討中のテニュア・トラック制度も合わせ早期実現を期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ−1−(3)大学の発展に向けた整備等に関する取組	89			○環境管理への取組みを積極的に進め、年間の電気使用量を大幅に節減し、年間CO2排出量の目標を上回る削減を達成した。 ○学生及び教職員に防災メール登録の周知を進め、登録者数の大幅増加をみたことを評価する。
				○CO2排出量の目標を上回る削減が達成されたことは評価できる。
				○横浜市と連携しキャンパス整備に積極的に取り組み、新理科館の実施設計、文科系研究棟・本校舎の基本設計がそれぞれ完了し、概ね計画どおり進められたと評価するが、今後、着工そして竣工に向け更なる努力を期待する。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-1-(4)情報の管理・発信に関する取組	92			○教育情報のHPへの公開についてディプロマポリシー、カリキュラムポリシー等大学の教育方針を積極的に公開その周知に努めていることは評価するが、市民の関心の高い入試や学生に関する詳細情報（例えば志願者数・受験者数・合格者数と入学者数、途中退学者数等）についてもさらに積極的公開を期待したい。また公開情報の最新の更新についても十分配慮されたい。 ○個人情報の適正管理への取組みを進めているにもかかわらず、センター病院において紛失事故が発生したことは残念である。 ○大学広報誌の配布部数の増加を図るとともに、新たにその英語版を発行したことは評価できる。
				○個人情報の紛失事故が度々発生することが、なぜ防げないのか。徹底的な対策に取り組むべきである。
				○個人情報管理の徹底については、センター病院にて個人情報の紛失事故が発生したことは、組織として大いに反省が必要である。（コンプライアンスとの関連でも）
				○情報管理の徹底については過去の事故を踏まえて事故防止に万全を期すよう要請をしてきたところであるが、再び同種の事態が発生し、極めて遺憾な事と言わざるをえない。個人情報の保護について、啓発、研修、点検にとどまらず、より組織的、体系的、システム的に情報管理の在り方を見直し、防止策を構築することを強く望みたい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-2　財務内容の改善に関する取組	95	B	B	○特に附属病院において医療機能充実のための各種の設備投資及びそのための必要人材の確保等の取組みによる費用の増加を当該年度の収益増で補うことができず赤字決算となったことは残念である。
			B	
			B	
			B	○附属病院の赤字については、施設整備の資金との分け方の問題で、運営費交付金の額が減になったことが影響しているということである。本来は運営費交付金の額と、施設整備に投資される額とは大いに性格が異なるので、赤字についてはある程度は割り引いて考える必要がある。
			B	○法人全体としては、運営交付金の着実な減少を図りながら、一方で付属2病院における入院単価、外来単価の増加等により病院収益が順調に増加したことと、外部資金の獲得に積極的に取り組み収益増に寄与したことなどにより、比較的順調に利益を上げた。 ○セグメント別で附属病院が359百万円の赤字計上となったが、これも医療機能の拡充のための医療職の増員と医療施設の整備に伴うものであり、一時的に収益圧迫要因となったが、今後の収益増につながるものと期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-2-(1)運営交付金に関する取組	95			
				〇法人化以降、運営交付金は着実に漸減傾向を示し成果をあげているが、、今後さらに収益力、効率化を推進し、財務改善により圧縮されることを期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-2-(2)自己収入の拡充に関する取組	95			○卒業生等に対する寄付金募集を積極的に進め、着実に寄付件数の増加に努めている。 ○引き続き外部研究費の獲得拡大を進め、法人化以降の最高額を獲得したことは評価できる。
				○大口の寄附が単発的に行われるのも歓迎するが、額は小さくても寄附の件数が年々伸びていくような取組が必要である。
				○外部研究費受入額が、法人化以降最高額となる35億円超を獲得したことは評価できる。
				○外部研究費受入額が法人化以降最高額の35億円超となったことは率直に評価したい。ただ継続的、安定的に高水準を維持するには、研究環境や研究水準の向上が不可欠であり、学術院の機能強化や資源の戦略的配分などと合わせ総合的な取り組みを期待したい。

年度計画（項目）			頁	自己評価	委員評価	コメント
		Ⅲ-2-(3)経営の効率化に関する取組	97			○新たにワークライフバランス行動計画推進委員会を設置し年次休暇取得の促進や超過勤務時間の節減に積極的に取組んでいる。
						○効果的な人件費管理の運用について～職員について、市派遣職員は減少し、法人固有職員が増加したことは評価できるが、総人数が昨年は89名、今年は84名増加しており、総人数増加の妥当性チェックのために職務内容の分析が必要である。（データ集3 雇用形態別教職員数） ○発注・支払い業務の効率化について、物品発注にかかるシステムを試行導入し、その効果測定を行い、本格実施の可否を決める年度計画について、物品発注システムの導入については、「システムの導入」が行われなかった。尚、「消耗品管理システム」の導入については、平成24年4月より導入している。 ○附属病院における大幅な赤字決算は、法人の月次決算が正確制とタイムリー制に問題があるといわざるを得ない。特に、人件費（予算対比 310百万円増）、医薬材料費（予算対比 31百万円増）については、予算と月次決算の累計を毎月きちんと把握していたのか疑問である。
						○効率的な人件費管理について、職員の採用を抑制するとともに、職員の固定化を進め、一方で職員の給与改定、超過勤務時間の縮減など一定の成果を上げた。また、消耗品購入について予算の一元化により業務の効率化を図ったことも評価したい。ただ、人件費の76%は教員人件費が占めており、どの程度いわゆる教員評価制度を反映した適正化が進められているのか、懸念が残った。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅳ　自己点検及び評価、認証及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するための取組	99	B	B	○月次決算を実施しているもの附属病院の赤字決算に示されているとうり年度計画に基づく事業の進捗管理の精度がなお十分でないことは残念である。 ○新たに3企画課（経営、学術、医学病院）の連携体制を確立し、年度計画の内容や管理方法の改善等中期計画の進捗管理を着実に進める仕組みづくりを進めた。
			B	
			B	
			B	
			B	○年度計画に掲げた諸施策が各分野で広範に実行に移され、大学運営が方針、計画に沿って概ね順調に推進されている姿がうかがわれた。経営方針会議などで随時進捗状況が検証され、その結果が経営に反映され着実に成果が上がりつつあると認められる。各部署間の連携も密になり,いわゆるＰ－Ｄ－Ｃ－Ａの経営サイクルがⅡ期中期計画期間に入り一段と軌道に乗ってきた感を強くしている。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
■備考（総合的な評価コメント等）				
				〇第2期中期計画の初年度として、第1期計画6年間の実績を踏まえつつさらなるその充実発展を目指して、概ね順調に各計画への取り組みが進められたことを評価する。国際総合科学部のコース再編、大学院生命医科学研究科の設置等の今後の積極的取組みを通じて第2期計画に定められた目標が着実に達成されることを期待している。 〇第2期中期期間は、経済のグローバル化の進展による厳しい市場競争のもと、わが国の高等教育全体も大きな変革が求められようとする時期でもあり、既に例えば国公私立を超えた法人間の教育連携の強化や秋入学実施の可否等など中期計画で定める枠組みを超える大きな課題が提起されつつある。法人の目標が第一に中期計画の着実な達成にあることはいうまでもないが、同時にこうした社会の急激な変動について積極的に対応しうる体制を整えておく必要があると思われる。学長の優れたリーダーシップのもと、学術院をはじめ経営審議会、教育研究審議会等の多様な場を活用し、これらの社会的課題への対応についても早い時期からの積極検討を期待したい。 〇前年度に多発した不祥事を受けて、本委員会ではガバナンス機能の強化及びコンプライアンスの推進につて特に留意すべきことを要望し、現に第2期中期計画には法人経営に関する諸目標の最初にこのことが明記されている。しかるにそれらの取り組みの有効性を疑わせる事態が明らかになったことは極めて遺憾である。今後そのための経営管理体制の確立、コンプライアンス意識の徹底、学内コミュニケーションの充実等への取組みが強力に実施されることを改めて強く期待したい。
				〇教育・研究・学生支援に関しては毎年進展が見られるが、ガバナンス・コンプライアンスの一部欠如により大学のイメージに好ましくない影響を与えている部分も見逃せない。学生にとっても、学んでよかったと誇りを持てる大学のイメージを作り上げていただきたい。
				〇大学の教育研究等の質の向上に関する目標達成や附属2病院に関する目標の達成については、着々と進められ、効果が現れている。（今年度の附属病院の赤字決算問題は別として）しかし、法人のガバナンス改革やコンプライアンス遵守にまだ改善の余地がある。（近年、何かしらの事件が起きており、それは本来あってはならない事が現実に起きていることが問題と考える。） 〇結論として、民間企業等では当然実施されている内部統制（監査を含む）、諸規定等の遵守が行われていないことが問題であり、事件が発生してからの対処のスピード不足と責任者の処罰等についても、もっと積極的な対応が必要と考える。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
（その他）				
				○ハラスメント防止研修の回数について～対象者の実施回数・参加者数共に教員及び管理職は「－」になっているが、実施・参加者数共にないということですか。 ○センター病院の運営交付金収益が予算982百万円、決算568百万円、差額414百万円～これは、当年度の固定資産が予算よりも414百万円（予算の約48％）増加したことになると思うが、予算と実績が大きく違うことに対して、問題はないのでしょうか。